「フランス・スイス心の旅 」

1997/8/27-9/3　池田 三省

１９９７年８月２８日、家を六時半に出る。ブルーの大きめのスーツケースを引きずりながら無事成田に着いた。
今回の旅の参加者の多くは初対面である。少し緊張気味である。しばらくすると参加者の顔合わせである。秋田の方、九州宮崎、福岡、四国の松山など日本全国からの参加者である。総勢三十名である。参加者の共通点は、作家「芹沢光治良」の愛読者の集まりである。芹沢先生が、大正十四年にパリに留学し、結核に倒れ、療養したスイスなど、先生の留学した土地と足跡を辿る旅である。

ＪＡＬ（11 時 35 分発のパリ行）の飛行機に乗ることができた。三人並びのシートである。最初の食事で飲み物の注文をするにも、要領がよく判らずアルコールはあまり強くないのに、白ワインを注文してしまい、昼間から真っ赤な顔をしての食事となった。しかし白ワインが美味しく、食事の飲み物は常に白ワインを飲むことになった。

１３時２０分頃、函館の近くの日本海の上空を飛んでいる。運行地図、現地時間、現地の温度などの情報が前方のスクリーンに現れた。現在どの辺を飛んでいるか一目瞭然である。４時間近く経った、今シベリアの上空を飛んでいる。周りは静けさを取り戻しおしゃべりも少なくなり、眠ている人達が多くなった。

私は数時間前には横浜にいた自分が今､シベリアの空の上にいる不思議さを考えていた。。新幹線など電車の旅は、時間の経過で周りの景色は変化する。そのため時間の経過と目的地へ向っていると実感できるが、動かない飛行機の小さな窓から外を眺めても停止した景色しか目に入らない。もうシベリアの空にいる不思議さである。また、飛行機の中の時間の流れは、過去へ向かって泳いでいるようである。しかし１２時間は長い旅である。到着３時間前の食事である。メニューは「チキンカレー」「サラダ」「フルーツ」「コーヒー」である。この食事が終るとすぐパリである。

「パリ　ドゴール空港」

８月２８日の１６時４５分にフランスのドゴール空港に着いた。飛行機のタラップを降り、水平線まで見える広いドゴール空港である。空港内は人が少なく、羽田や成田空港の様な賑やかさはない。またパスポートを見せるだけで、フランス語で受け答えをすることなく入国手続きも簡単に済み少し拍子抜けである。

東京でのパリの天気予報は曇りのち雨であったが、ドゴール空港に着いたときは、太陽が我々を迎えてくれた。しかし、入国手続きが終り、迎えの観光バスに乗り込むと、激し

い雨となった。モンマルトルのサクレ・クール寺院に近づく頃には、激しい雨も上り、驚くことに、雲と青空の上に「虹」が現れた。、バスの中は大騒ぎである。二月の我入道の集いの時も電車が止まるぐらいの嵐の日でも、帰る頃には、「虹」が富士山に架かった。パリでも、芹沢先生は「虹」になって我々を迎えてくれた。私もこの旅で「虹」に姿を変えて我々を見守ってくださる先生を信じることなった最初の「虹」の出会いであった。

パリの最初の訪問地は「サムライの末裔」の翻訳者「アルアン・ピラール」氏のアパートである。ポルト・マイヨー広場でバスを降り、初めてパリの街並みを歩く。行き交う人はみなフランス人である。第一印象は街並が美しく、しかも落ち着いている。歴史を感じさせる石の建物と歩道の並木の美しさである。」　７０年前に留学した先生も同じようにこのパリの美しさに感動したに違いない。フランスの街を歩いている自分に感動しながらピラール氏のアパートに向う。「凱旋門」、「シャンゼリゼ通り」を眺めながらモンパルナス・タワーの近くにあるホテル「メリディアン・モンパルナス」に１９時頃着いた。

私は、幸運にも十一階にある１１３２室を一人で利用できることになった。 夕食は２０時からであるがまだ外は明るい。フランスで初めての食事である。バイキング形式の夕食である。まずフランスらしい料理を選んで食べた。パンとチーズが美味しく、果物もたくさんある。もちろん飲み物は白ワインである。同じテーブルには石井さん、内藤さん、有原さんの四人である。

大きな声の有原さんは、秋田で「あきたこまち」を作っている四十代の専業農家の独身男性である。日本の農業問題が話題となり、秋田では農業をやめ勤め人になる人が多くなっている。スーパーで野菜やお米を買った方が安く農家をやる人が少なくなっている。農業をするには、お金のことだけを考えていたのではできない。収穫の喜び、自然とのふれあい、その喜びを感じられるから、私は米作りをやっている。今は両親と一緒にやっているから何とか経済的にもやっていられるが、両親がいなくなれば先行きどうなるかわからないぐらい、経済的にも大変です。農業の大変さを話され、私のような使命感もなく仕事をしている者にとっては耳が痛く、しかし羨ましくもありました。

芹沢先生がいつも言われていた、自分が好きなことをやっていれば、神は必ず助けてくれる。この言葉を信じ私も充実感を感じて仕事をしなくてはと思いながら、２１時３０分頃まで話は盛り上がり、初日の楽しい夕食は終った。

１１時頃寝たが、ずいぶ眠ったと思って目が覚めるとまだ２時半である。時差のためか何か変な気分である。冷蔵庫のミネラルウォター（２３フラン＝４６０円）を飲みながら椅子に腰掛けて、パリのぼんやりとした静かな夜景を窓ガラス越しに見ていると何か映画の一シーンを見ている気分になる。

８月２９日

朝食もバイキング形式である。品数が多く、山盛りに並べられた料理から選ぶのが大変

である。朝からこんなに食べていいのだろうかと思うぐらい食べてしまった。出発は８時である。バスに乗り込んだ。これから先生が若い日過ごしたパリ見学である。
最初は、ヘミングウェイの小説「日はまた昇る」で有名な「ル・セレクト」やガラス張りのテラスが銀色にかる光「ル・ドーム」など、ヴァヴァンのピカソなど芸術家達が通ったカフェを、映画のワンシーンを見るように眺めた。朝８時では開店していないためお店には入ることが出来なかった。パリの朝は街路地に水が流れている。街のごみを流しているらしい。パリは盆地であるため、水がきれいにながれている。

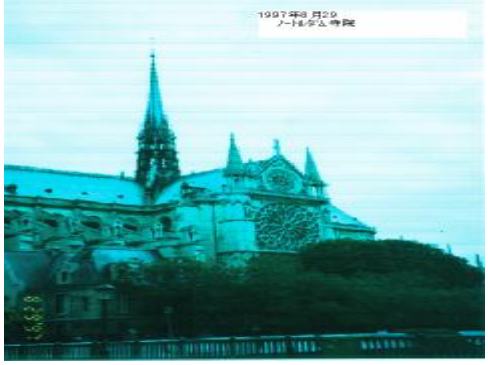
「リュクサンブール公園」

手入れされた背の高いマロニエの林の間を歩く、公園には九月のいうのに花が溢れ、マロニエの中に点在する歴史的に有名な王妃の像を眺め、１６世紀の時代に迷い込んでしまうほどの、その時代の建物が、現在の今でも生ている、なんとも不思議な感覚である。この公園を芹沢先生も散歩し物思いに耽ったのではないでしょうか。私も先生と同じ道を散歩していることに感激しながら、マロニエの林を歩いている。リュクサンブール宮殿を背景に記念撮影、もう気分は芹沢先生の散歩のお供である。

マロニエの林を歩いていくとテニスコート、小さい遊園地、まだ早いためか、遊園地には人は見当たらないが、日本とは違う何か絵になる風景でした。テニスコートのパリジェンヌ達を横目で見ながら散策である。もうバスの待っている場所の手前で「自由の女神の像」に出会った。ニューヨークの７分の１の大きさである。

ソルボンヌ大学前の「ブラン書店」で記念写真を一枚、進入禁止の標識を挟んで少し下り坂の位置で。あいにく「ブラン書店」は、お休みで店内に入ることは出来ませんでしたが、しっかりした店の造りで「ＬＩＢＲＡＩＲＥ　Ｊ・ＶＲＩＮ」がショー・ウインドーの上の壁に刻まれてありました。

芹沢先生は、この店で多くの古書を買い求め、若き日に、幅広く知識を吸収された思い出の書店である。。私の記憶では、この後、パリで最古の教会「サン・ジェルマン・デ・プレ教会」を遠くから眺め、ガイドさんより、初めて聞く「ドラクロワ」の画家のアトリエが近くにあり、今は美術館になっているといわれた。なんといい響きの「サン・ジェルマン・デ・プレ教会」であろう。６世紀に建立され、現在の姿は、１１世紀のままであるという。



「ノートルダム寺院」

あこがれのノートルダム寺院だ。パリに来たら必ず見たものの一つであったノートルダム寺院である。天上に届かんばかりに針のごとくそそり立った寺院、そのノートルダム寺院が朝のセーヌ川に美しく映えていた。正面の三つの門、右の「聖アンナの門」には、聖母マリアの母である聖アンナの物語（下段）とキリスト誕生の物語（中段）があり、上段の中央には聖母子像がある。左の「聖母マリアの門」では、永眠したマリアをキリストが来迎（中段)、天国でマリアに戴冠させるところ（上段）が見える。中央の「最後の審判の門」は、この世の終わりに世界中の死者が甦り（下段)、悪魔と天使「ミカエル」によって天秤にかけられ、地獄行と天国行に分けられる場面（中段）があり、上段から、厳しい表情のキリストがすべてに君臨している。
ここで忘れてならないのは、キリストの両側に跪いて祈っている聖母マリア（左）とヨハネ（右）であり、最後には慈悲深いマリアがとりなしてくれる。という信仰からノートル・ダムが建立された、と聞く。ノートル・ダムの中に入り、北と南の「バラの窓」のステンドグラスの大きさと深い色合い、窓からの神秘な光の影。沈黙の中で頭を垂れ祈ればすべてが許されてしまいそうな大自然の森の中にいるような森厳さを感じた。

「サント・シャペル」

次に訪れたのは「サント・シャペル」は「キリストの荊冠（イバラカン)」を治めるために１２４８年に建立された。現在、聖遺物は残っていないが、２階の礼拝堂のステンドグラスは当時のままである。内容は聖書の物語が語られている。創世紀からキリストの贖罪（ショクザイ：十字架に架かって人類の罪をあがなったこと・・交換する）までが描かれている。礼拝堂の小さな椅子に座り正面のステンドグラスに太陽の光が射しカトリック教徒でもない私も何かに祈りたくなる幻想な礼拝堂でした。
「ノートルダム寺院」「サント・シャペル」と拝見し強く感じることは「信仰の強さ」である。ヨーロッパ人の、神への信仰の歴史が現在まで途切れることなく引き継がれていることの素晴らしさ、その信仰の強さは、日本人の私には良く分からない。どのようにして「神の存在」をヨーロッパの人達は感じているのだろう。

昼食は、レストラン「フォーブルサントレール」である。奥まったビルの２階に上がると、「ボンジュール」の声で迎えてくれる。昼食のテーブルには、私と有原さん、石井さん、清水さん、恵理ちゃん達と一緒になった。私も、有原さんも喉が渇いていたので、食事の前に、ボトルの水を２本空にした。美味しい水でした。本場の白ワインを注文し、初めてのガーリック味の「エスカルゴ」と「ステーキ」の料理をゆっくりと１時間ぐらいかけて楽しんだ。部屋は木目の壁には人物の絵、アンチークな小さなシャンゼリアのある落ち着たパリのレストランである。

「バルザック記念館」

私はバルザックの作品を読んでいないため作家バルザックを良く識らない。パリの郊外で、道から階段で降りていく、偉大な作家の記念館としては、簡素である。記念館の周りには小さな庭があり、バルザックの像の前にベンチが置いてあり、落ち着いたパリの夫婦が腰掛けていた。記念に、一緒に写真に入ってもった。フランス人を見ていると思慮深く、教養豊かに感じられる。芹沢先生が、尊敬した作家の一人であるバルザックを読んでいないとは残念である。「人間喜劇」を読んでおけば、また違った感動を得られた場所になったのではないかと思った。

「ボワロー４８番地」

芹沢先生が留学していたとき住んでいた３階建てのアパートである。留学当時のままの建物である。現在も高級住宅地の中にある。家の中に入ることはできなかったが、先生がパリで生活していた場所に訪れることができた、今回の旅の大きな喜びである。さらに、この旅で２度目の先生の歓迎である。**虹色の薄い雲が太陽**の周りに現れた。みんな、空を見上げ、大声で「先生！」と呼び感動の嵐である。　　次に「ボーセジュール６３番地」ここのアパートに、少し住まわれたことがある。入り口で中を覗いていると、管理人さんから、中には行って見学してもよいとの許しが出た。中庭で記念写真、３階の先生が住んでいらした部屋をみながら。管理人のおばさんは、突然の大勢の来客に驚いたことでしょう。７０年前に住んでいた家を３０名の日本人が見たいと言うことに対して本当に理解できたのでしょうか？　通訳の戸塚さんが説明してくれたのでしょう。帰るときに「メルシー」と声をかけたら、やさしい目で答えてくれた。しかもこの時も、空には芹沢先生が、我々を見守ってくれているかのようにあの虹色の雲が空に浮かんでいた。

「エッフェル塔」

2000 年まであと 855 日のカウントダウンが表示されている。エッフェル塔には、登るのではなく、トロカデロ広場から真っ正面に切り開かれた空間に遠くエッフェル塔を望む、エッフェル塔のバックには青いく澄んだ空に白い雲がゆったりと止まっている。わずか 5 分のエッフェル塔の思い出である。

「モンマルトルの丘」

モンマルトルの丘の「白亜のサクレ・クール寺院」を背にしてパリを眺めるとパリを両手ですくい上げてしまいそうに感じるほどパリ全体を一望できる。そのパリを静かに悠然とサクレ・クール寺院が見守っている感じである。

テルトル広場では、似顔絵を描いている素人画家が多くいた。広場にはキャンバスが並べてあるが、人が多くてゆっくり見ることができない。またガイドさんより、スリに気をつけるようにとの注意がありゆっくり芸術にしたる事が出来ませんでした。観光客目当ての大道芸人が道端でパントマイム、ジャズやアコーデオンの即興演奏があり、毎日がお祭り気分である。

テルトル広場からフランス映画に出てくるようなガス灯、手摺が真ん中にある階段を降りて行くと、サクレ・クール寺院に登って行くケーブルカーが見える。

夕食は、「モンパリナンスタワー」の４５階のレストランで食事をした。６時頃から９時頃まで、パリを１８０度見渡せるレストランである。６時ではまだ明るく、パリを見渡して食事をしていると、エッヘル塔、凱旋門がライトアップされ、パリ全体の夜景をバックに話は、芹沢文学の出会い、同じテーブルには、文子先生、作家の小谷瑞穂子、高村御夫婦と同席になり、芹沢文学談義が盛り上がり、恵理ちゃんは、食事中寝てしまいました。ホテルまで有原さんがおんぶして帰ることになりました。

夜、添乗員の戸塚さんがフランスのシャンソンを聞く人を募っていたので、私も参加させていただき、３台のタクシーで便乗し、戸塚さんが各タクシーの運転手に行先を教え出発し目的地の近くで降りた。ただ5フランのチップをあげなければならないことだけが気になっていました。運転手がタクシーから降りて目的の方向を指差してくれた。少し歩いて行くと、田村さん達がすでに着いていた。 しかし一年前には、シャンソンが歌われていた酒場は、普通のパブになっていた。今夜は、シャンソンを諦め、夜のカフェでパリの夜をウォッチングすることにした。 ノートルダム寺院近くのワインレッドの布地に金色で「ＬＮＤＡＭＥ」のロゴが書いてあるカフェを選んだ。道から店内を見ると照明とガラスの関係で店内は軽い黄金色に光っている。オープンテラスに並べられたテーブルと藤の椅子でビールを飲みながらフランスの夜を満喫した。

感動の中で二日目が終りました。

８月３０日

今日は、パリ郊外の観光である。

シャルトルの大聖堂とベルサイユ宮殿の観光である。朝８時３０分出発である。シャルトルに向うバスの中から、フランスの田園地帯を見ることが出来た。フランスは農業国であることを再確認した。地平線まで続く畑、その中にぽつんと立っている教会なんとも、フランスの田舎の絵様である。シャルトルが美しく見える場所でバス止まった。外は小雨であるが、その場所から見るシャルトルの町は大聖堂を中心にした絵本のような美しい街である。バスを降り大聖堂に向う道は、昔、馬車で通った道を歩いて行く、両側の塀の間から尖った大聖堂の屋根が見える。この道を敬虔なキリスト教巡礼者達が 400 年前に通った道を歩く歴史を感じさせる道である。

二つのそそり立つ塔がある北の塔はゴッシック、南の塔はロマネスク(シンプルな塔）である。屋根には町を見守る天使像が右手をさしのべている。大聖堂の門は、木造である。パリのノートルダム寺院と同じように天地創造からキリスト降誕まで、人類の歴史を物語り、最後の審判の日が刻まれている。 大聖堂の正面「王の門」から入り、振返ると天上に向って見る「シャルトルのブルー」と呼ばれる深く、神秘的で鮮やかなブルーのステンドグラスである。キリストの一生を描いた「生誕から全生涯」、「受難と復活」その上に「バラの窓」がある。出口近くに敬虔な信者のための祈りの十字架、天使の像が売られていた。私もこの信仰の町シャルトルの記念に「天使の像」を買い求め、神の恩寵を少しでも承りたいと願う。

「ベリサイユ宮殿」

バスから、ベルサイユ宮殿が見えてくる。太陽に続く並木道の中を進んで行く、正面には、煌びやかな門。ルイ 14 世の騎馬像までの広々とした石畳。ルイ 14 世の騎馬像に従うように、両翼に繋がる膨大な建物と庭園が私を圧倒する。 私は、石畳を一歩々踏みしめてルイ１４世の像に近づいて行く、ルイ１４世の時代にタイムスリップである。

「豊饒のの間」「アポロンの間」などの各部屋の天上に描かれてた絵に見とれていた。庭園に面した「鏡の間」幅１０ｍ奥行き７５ｍで１７個の窓が庭園を眺めることが出来る。なんとも贅を尽くしたベルサイユ宮殿である。

庭園出でる。花の名はわからないが、花が溢れている。アポロンの泉を宮殿の庭に腰掛けて眺めていると、地平線まで、直線に続く道その両側には林があり、その中には緑の絨毯が敷き詰められたような緑の道が続いている。太陽への道のようである。この空間に居ると「マリーアントワネット」の物語の中に入り込んでしまう。このベルサイユ宮殿でル

イ１４世の生活が営まれていた。また現在もこの場所にベルサイユ宮殿は存在する。なんとも歴史とは不思議である。 現実の世界から、夢の世界に入れ込んで、そのベルサイユ宮殿にマリーアントワネットの息づかいが感じられるような世界に迷い込んで時の経つのを忘れて心の中に貴族への思いを募らせながら、現実の世界に戻って行く。　ベルサイユ宮殿の余韻のままパリに戻る。

「ブローニューの森の晩餐」

　みなさんドレスアップである。 ホテルよりブローニューの森のレストランに向う。競馬場の側を通り、本当に森の中のレストランに着く、森の中にライトアップされた白亜の３階建てのレストランである。正面玄関から入り階段を上り２階の一室を貸し切ってのディナーである。 隣のフロワーでは、フランス映画の一場面のような、ブルジョワ達の結婚式のパーティが開かれている。着飾った女性、スマートに決めている男性達のお洒落なパーティを横目でみながら､私には二度と味わうことのできない、「ブローニューの森の最後の晩餐」の始まりである。シャンペンで乾杯し、肉料理、ワイン、初めて経験するフランス料理である。何といってもフランスのブローニューの森での食事をしている自分に酔っている。　最後のデザートのアイスクリムの美味しかったことを一言付け加えておきます。

　４つの円テーブルに分れ、晩餐会の始まりです。話題は芹沢文学で盛り上がり、搭乗員の戸塚さんの楽しい話し、このようなパーティでは、会話や話題の豊かな人がいるとパーティは盛り上がり会話の楽しさがわかってくる。 自分の話題の少なさにがっかりである。やはり教養の低さと会話の下手さはどうしようもないが、会話のきっかけは、まず自分から始めなければ会話は弾ずまない。

　２階のバルコニーから外を眺めると、まわりには、大きな木が繁っている。近くのレストランも見ることはできない森の中である。樹齢５０年以上の木が多く、静かで、しっかりと落ち着いた森の中のレストランである。

フランスの上流の人達は、週末には、お洒落をして、こんな落ち着いたレストランで楽しい食事と会話を楽しんでいるのでしょうか、そんな幻のような晩餐をこの旅で味わえることができた。

「モンマルトルの シャンソン酒場」

　今夜は、マンマルトルの近くの「Au　LAPIN AGILE」シャンソンハウスに１０名ぐらいでタクシー３台で行くことになった。最年長８０歳の石井さんも行かれた。元気である。 坂の途中にある古ぼけた作りの建物である。入口は狭く、カーテンで仕切られている向うのステージから、歌声が聞こえてくる。１ステージが終るまで古びた椅子に座って待っていた。部屋には黒壁にイラストや絵皿が架かってある。有名人と思われる人達の写真も飾っ

てある。ステージに入ると、木のテーブルと小さな椅子。５０人ぐらいで一杯になる部屋である。お客は、半数以上が日本人である。フランスの裏側というのは当たらないかもしれないが、ブローニューの森で垣間見た上流のフランス人とは、違うフランス人を見ることが出来た。またシャンソンの雰囲気にしたることが出来たが、ギターを持った男性の歌い手は、言葉はよく解らなかったが、日本人を小ばかにしている風で、あまり良い印象をもてなく帰ってきた。ホテルに着いたのは１時近かった。

８月３１日

メリディアンホテルを朝８時に出る。３泊したこのホテルともお別れである。ベッドメークしてくるメイドさんへ、有り難うの置き手紙と１０フランと折り鶴を置いてきた。

バスでルーブル美術館に向う。バスでは、昨夜の「ダイアナ妃の事故死」が話題となった。２０分ぐらいでルーブル美術館に着いた。ピラミッドの下のナポレオンホールに着く。まだ９時前であるが、たくさんの人が並んでいる。エスカレータを上がるとルーブル美術館の入口である。　まずは、「古代エジプト美術」である。少し緊張しながらガイドの「タカツナ」さんの話を聞く。「書記座像」この彫刻から、その時代の人間像が解ると言う。顔にはモラルが表示されているという。紀元前２５００年の頃の作品らしい。赤色の石灰岩である。この時代の作品を１９９７年の現在で本物を見にする凄さと、今の人の体格に似ている。服を着れば、現代人としても通用する。

「古代ギリシャ美術」の「サモトラケのニケ」（紀元前１９０年頃）ニケとは勝利の女神の意味らしい、ペルシャ戦の勝利の女神像である。首から上はないが、翼、向かい風を受けて服が肌に巻付いている。美術の教科書によく見る彫刻である。平面の絵でなく立体の彫刻である。船首で風を切って勝利の旗をなびかせているようである。

「ミロのヴィーナス」（紀元前１００年頃）あの有名なミロのヴィーナスである。本物を真近で見ると、結構筋肉質の女性である。右足の指が力強く、ねじれた体を支えている。

「パレステノン神殿のフリーズ」（紀元前４４２頃）このアテネ大祭の娘たちの手の表現、男の手の筋肉、血管が表現されている。女性の服のしわの流れが美しく表現されている。

「ランパンの騎士」（紀元前６世紀の中頃）馬に乗って、槍をかざしている騎士の顔が笑顔である。目、口元が微笑んでいる。このスマイルを「アルカイツク・スマイル」と言うらしい。そういえば、ルーブル美術館の中で微笑んでいる作品を思い出すと「モナ・リザの肖像」と「ランパンの騎士」ぐらいしか思い出せない。

「モナ・リザの肖像」（1503―1506 頃）モナリザの瞳を見つめていると、モナリザが私を見つめて行くる、そして口元が少し緩み私に微笑みかけてくるようである。やはり人気の作品である絵の正面にいくまで混んでいたが、日本の様な行列待ちではなくゆっくりと鑑賞できた。

「レオナルド・ダ・ヴィンチ」と「ラファエロ」が聖母を描いた作品がある。

ダ・ヴィンチの「聖アンナと聖母子」とラファエロの「美しき女庭師」（聖母、イエス、ヨハネが跪いている）ラファエロの絵は、静止した世界を写真のごとく背景も正確に描写している。しかしイエスと聖母子の眼差しには優しさが感じられない。ダ・ヴィンチの絵には動きと聖母とイエスの眼差しの優しさが感じられる。　背景はぼかしを使っている。作品の良さは私にはわからないが、ダ・ヴィンチの作品が人間味を感じる。ラファエロの作品は清浄な、汚れを感じさせない潔癖感を感じる。

「ミケランジェロの彫刻」

「奴隷」は、箱根の彫刻の森美術館でレプリカを見ることができる。しかし本物である。テーマは「死」、逃げるか死するか、人間の苦悩、この彫刻の筋肉の表現、一本彫りのテクニックの素晴らしさと、やはり力強さ。芹沢先生の「離愁」の最後に、フローレンスのミケランジェロの博物館で、あの有名な奴隷像を眺め、鎖につながれて、救いを求めているように、目を天にやってもがいている男の苦悶が製作者のミケランジェロの苦悶に感じられてならなかった。「主よ、天国のさまざまなものが、それに連なり懸っている鎖を私にお投げください」　その鎖とは信仰のことです。

ルーブル美術館は、広く数多くの作品があり、すべて見る事は出来なかったが、今回は、代表的な作品をガイドさんの説明付きで見ることが出来た。

「オルセー美術館」

セーヌ河の近くにあり、旧オルセー駅を改築した美術館である。ルーブル美術館とは違い、絵画が中心である。「マネ」「ドガ」「モネ」「ルノワール」「セザンヌ」「ミレー」などお馴染の作品が多くあった。 オルセー美術館はルーブル美術館ほど広くなく、ゆっくりと見てまわる広さである。ここでは、ガイドさんがいなく自由に鑑賞することになった。
ミレーの「落ち穂拾い」、カミーユ・コローの「朝,ニンフの踊り」全体を大きなうっそうとした樹木でおおい、その木の下で小さな人物（ニンフ）達が踊っている。透明で軽く自然を中心に据えた風景である。　クロード・モネの「かささぎ」雪に覆われた風景に黒の鳥。何か印象に残った絵である。エドカー・ドガの「ベレッリ一家」家族の絵であるが、娘二人と父と母のそれぞれの視線が交わることなく各人の孤独な世界を漂わせている。何

か寂しく冷たい絵である。 エドｳアール・マネの「オランピア」オルセーで最も有名と言われている娼婦の裸婦像である。
これらの絵をゆっくり２時間ぐらいかけて見て回った。
これでフランス・パリともお別れである。芹沢先生の愛したパリとも。
セーヌ川を右に見ながらリヨン駅へと向った。

「リヨン駅よりローザンヌへ」

　リヨン駅は、ちょうどバカンス先からパリに帰ってくる人達でごった返していた。タクシー待ちの人達も苛立っているのか、大きな声で言い争っている。このリヨン駅からフランスの新幹線Ｔ・Ｇ・Ｖのグリーン車でスイスのローザンヌに向う。フランスの小銭を残すのはもったいないので、ダイアナ妃の載っている新聞と雑誌を買って乗り込んだ。
　電車の窓から、すぐにフランスの田舎の風景が見えてくる。パリの歴史的な建築とは違う、農村の建物が見に入る。フランスには日本のような小さい山はなく、平野が広がっており、ヨーロッパの雰囲気のある「ミレーの描いた農村」の風景を感じさせる絵が車窓から見えてくる。　男性５名（鈴木、高村、田村、戸塚、私）で、ビュッフェに行き、ビールとワインを飲み、パリの話と、鈴木さんと戸塚さんのダジャレ（言葉遊び）で盛り上がり、スイスのローザンヌ駅に着く。 リヨン駅から約４時間ぐらいで着いた。しかしもう２１時近くである。　ローザンヌ駅も探索する間もなく、迎えのバスに乗り込み今日の宿泊地モントルーのホテルに向う。
　レマン湖のほとりの５星ホテル「モントルーパレス」に着く。 部屋割りで、有原さんとご一緒することになった。　今まで一人部屋で気楽にしていたのですが・・。このホテルの通路には厚い絨毯が敷かれてあり、幅広く各部屋に入るためには、その通路からもう一段奥まった位置にドアーがある。広いスペースとゆったりとした空間のあるホテルである。部屋の蛇口をひねると、冷たい水である。この水は飲んでも良いとのことである。レマン湖の対岸には水で有名なエヴィアンがある。納得である。冷蔵庫で冷やしたような冷たい水をコップでがぶ飲みである。美味しい水である。
　朝、早めに起き、有原さんと朝食の前に、ホテルの前のレマン湖を散歩した。誰もいないレマン湖の朝である。静かな水面には、小さな三角のブイが浮かんでいる。少し残雪の残る「南の歯」(ﾀﾞﾝ･ﾃﾞｭ･ﾐﾃﾞｨ)がくっきりと望め、朝焼けの雲が細長く浮かんでいる。この静寂なレマン湖の朝のような、遍路にも似たスイスの旅始まりである。
　　「コー（Caux）に出発」

ロッシェ・ド・ネーの中腹にある「ブルジョア」「孤絶」などの舞台である療養所（サナトリウム）「コー」に向けてバスで出発である。 大型のバスが、一度に曲がりきれない急なカーブを何度も切り返してやっと通過する山岳道路である。途中、レマン湖やシヨン城を眼下に見ながら、約１間ぐらいかかって１８００メートルのモントルーからの登山列車の「コー」の駅に着く。駅の前には芝生と高くそびえて風に揺らいでいる木のある広場である。　駅はレンガ色の屋根の上に小さな六角形の尖塔がちょこんと乗っかかっているような､その塔のの中には小さな鐘が揺らいでいる山狭の中の小さな駅である｡今日は休日なのか駅員が誰もいなく、売店もにも店員さんがいない。本当に電車が止まる駅なのか不思議である。　駅から、ブルジョワの作品お舞台となった「希望（エスポワール）」の療養所を望むことができるが､現在は一般の人はその建物に入ることは出来ません｡４階の１２１号室を眺めている｡先生も､あベランダで雪に埋もれながらも寝椅子に仰臥しながら今と同じこの青い空を眺めていに違いない。先生は「孤絶」の第７章で「コー」に着いたときの描写があります。

「レマン湖が遥か真下に一望のうちにおさまっている｡右手には､朝汽車で経て来た湖畔のクラランからローザンヌの街まで見えて、微かにけぶっているのがジュネーブだろう。左手には、湖がつきて、シンプロン行の汽車が山岳にはいるまで見える。そして、正面にはフランス領オート・サボアの山々が重なり合った上にやや左に水晶のようなモンブランがのっている。それから、まるく地平線を色どってたなびく藍色の空の色」　このような表現は私には書けないが、本当に先生がこの風景に見とれられとことがよく解ります。

「孤絶」の第８章に描かれている

「ソーニャは不思議なことに、レマン湖はどこから見たら一番美しいとか、アルプスはプロテスタントの教会の裏からの眺望が雄大であるとか､「南の歯(ﾀﾞﾝ)」の眺望は何処がいいとか､・・・」のその「南の歯」の眺望のいい場所はどこかなのか､「コー」に咲いている高山植物の花の写真を撮りながら、恵理ちゃんと二人で、教会の側の坂を登り落葉松の林をぬけ、曲がりくねった坂を過ぎると、尖った教会の屋根、十字架と丸いステンドグラスが視界に入ってきた。その教会のバックには、くっきりと青い空に向ってそそり立っている「南の歯」が見えた。この場所こそ、ソーニャが言っていた「南の歯」と教会の眺望のいい場所であると私は思った。この遠近法で描いたような教会と「南の歯」のいずれもが、静かに調和して見ることのできるのは、この場所だと一人決めてしばら近くにあった切り株に腰掛けて見に焼き付けた。

この場所を発見したことで､「コー」が描かれた先生の作品を読むたびに、この場所からの眺めを思い出すことでしょう。 コーには、たくさんお花を見ることが出来ました。

「桔梗」のような紫の花、「トラノオ」に似た白い花がコーの駅の回りにたくさん咲いていた。コーの駅前の小さな広場にある大きな木と芝生の緑を後にしながら、次の目的地「リヨン城」へとバスは坂道を下って行った。

「シヨン城」

レマン湖の冷たく澄んだ水、湖からそそり立つ苔むした灰白色の城壁、山稜の濃い緑、その稜線を包み込む薄い青空を遊覧船のデッキから眺めた。　城に入る。外見からの美しはとは違い、歴史の重さを感じさせる建物である。地下の牢獄には、囚人の落書きがくっきりと刻まれている。この「シヨン城」も先生の作品「遠ざかった明日」の第５章に書かれている。シヨン城での晩餐会を行った広い部屋には黒光りのする重厚な木のテーブルと椅子が並んでいる。先生もこのどれかの椅子で文部大臣の感動的な挨拶を聞いたのでしょう。　このシヨン城でのもう一つの感動的な出来事は、奥まった場所の小さな礼拝堂で、文子先生と沼さんの二人が歌った「アベマリア」である。礼拝堂の二人の歌ごえは、小さな礼拝堂に響き渡り天の光が私たちの心を包み込むような優しい歌ごえでした。

「ミラドールホテルの昼食」

モントルー近くのリゾート地ヴエヴェイの「ミラドールホテル」での昼食である。シヨン城からホテルに向う坂道の両側に葡萄畑が広がっている。葡萄の木は日本のように高くなく､桑畑のような低い木である｡この地方は美味しいワインの産地としても有名である。坂道の葡萄畑を登り切ると、バスは、広大な手入れのされた畑の中を縫うように走る。スイス牧歌的の田園風景である。ホテルは山の中腹モン・ベルランにある。屋根はオレンジ

色、各部屋の庇はイエロー、壁の色はホワイトである。なんとも近代的なリゾートホテルである。レストランの一室を貸し切りである。その部屋からは、眼下にレマン湖が一望できる。レマン湖の水面に薄い氷が張っているように波はなく静かである。レマン湖を取り囲む山稜が湖をせきとめているかのようである。メニューは、"Serizawa Tojiro Tour"の特別のメニューまで揃えて思いやりのあるのサービスで迎えてくれた。地元の白ワインと魚料理 ("Filets de perche meuniere")のフルコースである。デザートのアイスクリームは大変美味しかった。

「ローヌ渓谷を溯る」

ローヌ川は、濁っており氷河の溶けたような冷たそうな、少しクリーム色した流れの速い川である。 渓谷に架けられた高い橋から、渓谷を見下ろすと、ローヌ川が山稜の間に入り込んで蛇行している様子わかる。ローヌ川に沿って、尖塔の教会を中心にした町が点在する。シオンの町は、二つの岩山と古城がある中世の遺跡を残した印象深い町である。ローヌ谷を遡り「ツェルマット」へと向う。　　自然環境を守るため車では「ツェルマット」に行くことは出来ない。車の最終地点「テッシュ」から電車で行くことになる。テッシュは見渡す限りの駐車場である。テッシュには日本人のサポータが待っていいて、すばやく荷物を電車に運び込んだ。電車には荷物を運ぶワゴンを止めるためのベルトが天井から吊るされており色々配慮されている電車である。約３０分ぐらいでツェルマットに着いた。

「ツェルマットとマッタホルン」

駅前には、ホテル（モンセルヴァン）の二頭立ての馬車が出迎えており、荷物と人を運んでくれる。しかし、馬車に乗らないでゆっくりとツェルマットの街並みを見ながらホテルまで歩いていく。駅の広場の近くのすべてのホテルのベランダというベランダから、赤

い花のプランターが飾られてあり観光客を歓迎している。駅の広場からは、少し、マッタホルンの先端が見える。空に向って突き上げている。大きな氷の固まりをノミで、荒々しく削ったようなマッタホルンの先が駅の裏山のに姿を見せた。
あー。　　感激である。　　マッタホルンである。
自然に顔がほころび心ががワクワク、何か大声を出したくなってくる。
　ホテルの部屋のベランダから､尖塔の教会の遥か遠くにマッタホルンの全景がはっきりと見える。参加者全員で、マッタホルンが一番美しく見える場所に行く。ホテルを出てバーンホフ通りをマウリチウス教会の方に歩いていくとマーモットの泉がある。その泉を左に曲がると、山で遭難した人たちを埋葬した墓地がある。その墓地の向かい側にマッタホルンを見るための望遠鏡が設置されている。しかも無料で展望することができる。少し歩くとマッターフィスパ川に架けられた橋がある｡その橋から見るマッタホルンが絶景である。マッタホルンの荒々しい岩肌には、竹箒で撫でたような雪がこびり付いている。なにものも寄せ付けず、空に向ってそそり立つ沈黙の墓標のようである。ホテルに戻り、周りが暗くなり、うっすらとした教会の明かりと、静まりかえったツェルマットに黒々とどっしりし聳え立つマッタホルンがある。この旅の最後に見たマッタホルンの姿である。

「モンテローザ」

　今日はモンテローザに登る。ホテルを８時に出る頃には、ぽつぽつと雨が降ってきた。昨日見えていたマッタホルンは厚い雲の中である。ツェルマットから登山鉄道は、ゴルナーグラードに向けて発車する。約４５分のアルプスの旅である。電車からツェルマットの中心から外れた家並みの美しさ、緑の針葉樹に囲まれた教会を中心に、薄く黒い岩の瓦の屋根。白い壁、それぞれの家の周りには手入れされた緑の牧草がある。その後ろには、大きな岩肌がむき出しの山が迫っている｡落ち着きのある清潔で清楚な家並みが続いている。高度を稼いでいく､ローデンボーデン駅 に停車する｡周りにはモミ木など木は見られなく、牧草というか草しか生えていない。しかし、小さな色をつけた花を見ることができた。
　コルナーグラードに着く頃には、雨の上がり、雲も切れてきた。しかしマッタホルンは相変わらず雲の中である。終点のゴルナーグラードの駅はレンガよりも堅い岩がセメントで固められた、岩肌がむき出しの壁である。冬の雪と吹雪に絶えるためのしっかりと造られた３，１３０メートルの山頂の駅である。モンテーローザに近づくため、シュトックホ

ルンまでは、２本のロープウェを乗り継いでいく。ここからは観光客は少なくなる。我々のグループの貸し切り状態である。シュトックホルンの目の前には、ゴルナー氷河が濁流のように波打って流れている氷の溶岩のように黒い大きな岩肌を呑みこむ見渡す限りの大氷河である。その奥に白い雪と氷でおおわれた大きな山「モンテローザ」がある。

モンテローザの氷河からのかすかに流れ落ちる水が、深い青く光る小さな池に白糸のように流れ落ちている。その池は、永遠の氷河の雫をかき集めている。その池から溢れ出た雫がこぼれている。そのいけの遥か上には、岩ばった氷河が続いている。

天とアルプスを繋ぐ空間には雲間からの太陽の光が小さく差し込んでいる。一歩踏み出せば、フィンデル氷河に、真っ逆さまに落ちて行きそうな小さな祭壇のような丘がある。

目の前には「薔薇の山」と呼ばれるモンテーローザ、夕日がその名を与えたのだろうが、私たちには「沈黙の山」であり、静寂で、氷河の解けて流れていく音しかしない世界である。これが自然の大聖堂なのかもそれない。「人間の運命」の中で田部氏が身を投げた薔薇の色の大聖堂である。先生の作品の一場面を今、自分の目と肌の寒さと、シュトックホルンの小さな丘に立って感じられる幸福は、二度と味わうことのできない体験である。 この静けさと、寒さと、モンテローザにかかる雲、モンテローザを囲むように広がっている大氷河を心に刻み込んだ。幸いにも有原さんと二人で、モンテローザを前にして 30 分ぐらい沈黙の世界に想い馳せることができました。本当に二人だけで、誰もいない静寂な神聖な中で、何を求め、何か奇跡を、神の声を聞けるかも知れないと思いながら、この大聖堂を前で、自然の偉大さ、凄さと、人間の一生の短さなど思いながら、小さな岩に腰掛けて大氷河とモンテローザを眺めていました。その時に書いたメモです。

「モンテローザを前に」
霰がパラパラ肩にあたる。
岩に腰掛けただ、モンテローザを見つめている。
モンテローザの頂きは、雲で見えない。
氷河の静けさ、かすかに聞こえる氷河の溶けて流れる音。
この場所に立ち、神を想う気持ちは、氷河に降り注ぐ天井からの
一筋の光の道が、私を誘っている。
一歩踏み出せば、天上に登って行けそうな気がする。
あの白い貫けるような白い氷河に降り注ぐ光の道は、
私を天にいざなう道のように想われる。

風が氷河を流れ
モンテローザは頂きを雲で隠し
氷河は永遠の静けさと美しさ
天上へ続く光の道

こんな心境にさせるモンテローザでした。
雲に隠れたモンテローザを後ろに見ながら、大きなロープウェに運転手と有原さんと三人だけである。ゴルグナードで買い物をしている皆さんにやっと合流である。ゴルグナードで、お土産のマッタホルンのカレンダーと絵葉書を買い帰りの登山列車に乗る。
帰りの電車の窓から、雲間からマッタホルンがかすかに見える。雨に濡れた牧草に山羊たちが群がっている。電車と平行にある稜線にはハイキングをしている人達を小さく見ることが出来る。もしもう一度くる機会があれば、マッタホルを見ながらハイキングをしたいものである。いっきに氷河から岩場、牧草地、針葉樹の林を降りツェルマットに着く。　駅の近くのドイツ風のレストランでポテト料理、白ワインを飲んで楽しい昼食である。食後は自由時間である。みんなお土産を買うためにツェルマットのお店に散らばって行く。ツェルマットのお土産にエーデルワイフの置物とテーブルクロスを買った。バスの駐車場のテッシュまで、電車に乗り、ツェルマット、マッタホルンともお別れである。
　スイスの山の美しさを目と心と体で実感できたツェルマットともお別れである。もう一度訪れたいアルプスの町である。
　今夜(9/2)の宿泊地ジュネーブの「デェ・ローヌ」に向う。今度はローヌを下る約4時間半のバスの旅である。途中、ドライブインで休憩。そのドライブインには、スーパーマーケットがあり、スイス産のリンゴを買って食べたが、日本のリンゴに比べてうす味であった。ローヌ渓谷を下り、レマン湖を眼下に見ながら高速道路を一途にジュネーブに向う。シヨン城も眼下に見えレマン湖を左に見ながらジュネーブのホテルに着く。凄く豪勢なホテルである、さすが五星である。今日も一人部屋である。一生こんな凄いホテルに泊まることはないだろうと思いながら部屋に入る。今日がこの旅の最後のホテルでの晩餐会である。一階の一室を貸し切っての食事である。部屋はシックで落ち着きのある壁と円テーブルに透明のガラスに白いキャンドルが置かれている。白ワイン、本当に美味しいワインである。隣の高村さんとグラスが進む。もちろん料理もフルコースであるゆっくりとこの旅の思い出を語りながら楽しいディナーである。

　今日はこの旅の最後の１日である今日の２０時には日本に向けての飛行機の中である。ジュネーブの観光である。宗教革命で有名なジュネーブのモンブラン橋の公園からレマン湖の大噴水を見る。力強いみずしぶきが上がっている。大きな花時計がある、今日はあいにく動いていない。「オーヴィーヴ公園」のバラ園があり、広々とした芝生が広がり、なんとも静かなバラ公園である。文化の尺度は、都市の公園の占める割合が高いほど、文化の高い国ではないかと思うぐらい、自然、公園、緑が豊かである。スイス、パリは、緑の多く管理がされている公園が多くある。日本にだって多くの公園はあるだろうが、このように管理されていて美しい公園は横浜にあるだろうか。

ジュネーブ大学に面した「バスチョン公園」

サン・ペエール寺院を眺めながら「バスチョン公園」でジュネーブ大学に面した「宗教革命記念碑」、カルヴァンらの４人の石像がある。宗教革命を勉強しておけばもっと興味をひかれたかも知れないが。四体の石像は､背筋を伸ばし､みんなアゴひげをたくわえており。自信に満ちた像である。この小さな街ジュネーブで宗教革命が行われたのはなぜなのであろう。少し調べてみたい気持ちになる。　ジュネーブの観光が終えて、ジュネーブ空港から、第三の国ドイツのフランクフルトに向う。

ドイツ・フランクフルト

空港からフランクフルトに向う道は、黒い森と呼ばれる林の中を抜けていく。その林の中には、ジョギング、サイクリングの道が整備されおり、林の中に公園になっている。フランクフルトでは「ゲーテ記念館」を訪れたその中で、現在も動いているカラクリ時計が印象に残った。町中を歩いてみて、ドイツ人の女性はスカートの姿が少なく、男性と同じような体格のがっちりした女性が多く、スラックスで大股でさっさと歩いていく姿には少し驚いた。また男性は、分厚い胸板である。スイス、パリでは感じなかった、外見的に少し恐い感じがした。しかし、オープンカフェのウェートレスの女性は、小柄で笑顔の優しい働きもの女性のよに思われた。

フランクフルトを 20 時に出発である。

楽しく感動の初めての海外旅行であった。この旅は、私にとって一生心に残る旅である。唯一残念なのは、かおるちゃんと一緒でなかったことである。こんどは、省悟、美里も成人になって、二人で暇と金が残っていたなら無理をしても一緒に行きたいものである。

芹沢先生の作品を高校生から読み始め、もう２７年になります。この芹沢文学を愛読してこれたのは、先生の作品の読み終えた後の「心に残る幸せ感」、「心の洗浄感」、「心が癒され、人間を励ましてくれる、未来は、必ず明るい気持ちにさせる希望を抱かせる作品だからである。 いつまでも、何度でも読み直しても、常に新しい気持にさせる、前回に増して心が落ち着いてくる。

他の作品を読むと、一度見た映画は、二度目はなかなか見る気にならないと同じように、読み返してみたいとは思わない。 先生の作品は何度でも読み直したい、ノートを取りながら読みたくなる作品である。この永遠に尽きることない泉のように湧き出る芹沢文学の心の想いを、私の小さな心ではすぐに溢れてしまいます。また 読み直して心をいっぱいにしたくなる。このことは、反面私が成長していない証になるが、しかし芹沢文学は枯れることのない心の泉である。

以上